

吾が紅葉期人生の自覚を踏まえて、これまでの生き様カーブを振り返った。

その1；皆に、それぞれには、他とは比べ難い個性的な生き方があって、様々な人間関係の渦の中で一所懸命に生きている。不老長寿を願いつつも、不老不死の願いも叶わなく、いずれは命を畳まざるを得ない人生である。儘ならない悲喜交々の人生である。私は人生終焉の寿命まで後ろから数えた方が手っ取り早いという感じになったこの歳である。私の人生は起承転結の結の領域に到達した、いわゆる世に言う終活領域突入である。終末のあがきを如何に楽しむのか、の世界である。まあ私の両親や親族を見て来た事を振り返るとそのような実感がする。こんな事を思う時に浮かんで来るのが、**図-1**のとおり「吾が人生放物曲線」

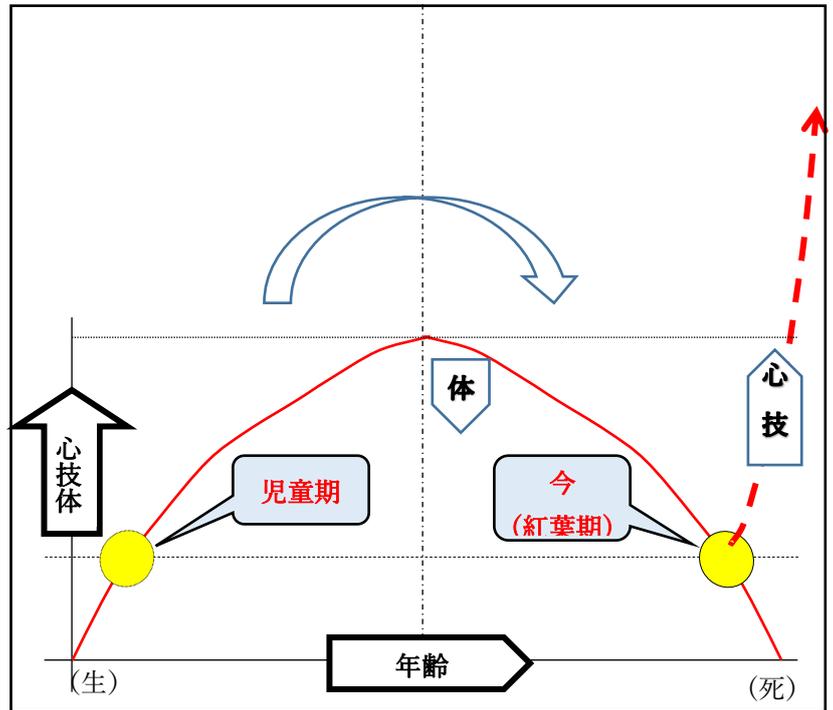


図-1

のイメージである。ここでの『技』とは頭脳の聡明度をいう。「心技」をあえて上向きに描いたのは、身体の衰えとは逆行する強がりである。

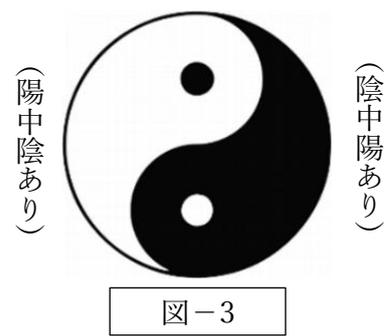
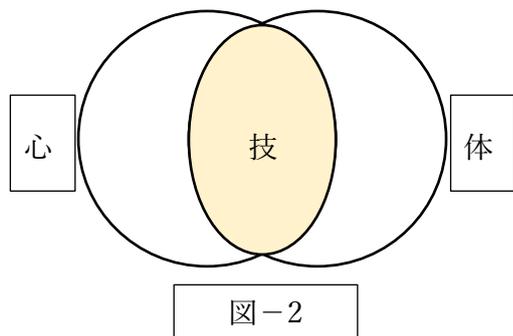
祖先からの命のリレーで人は生まれて、年齢と共に「心・技・体 = 心（認識や精神）・言（言葉や言語）・行（行動や活動）」が成長・充実して行く。「三つ子の魂百まで」から、利かない盛りの5歳児になり、小学・中学の義務教育を受け、受験戦争の中を潜り、成人・社会人となり、会社ではパワハラと何百段階もの能力評価でしごかれながら人生の盛りと言う心技体が最高に充実したピークを迎える。そのピークは永続することなく成熟の域を抜けるように、それ以降は、加齢と共に下降線を辿り、老衰の域からやがては人生の終着駅に到達し死を迎える事になる。時の最高レベルの学者や専門家が取り巻いている天皇陛下も、その寿命は、神武天皇 126 歳、仁徳天皇 142 歳、崇神天皇の 168 歳、垂仁天皇の 140 歳などのいろいろな胡散臭い説があるようだが、いずれにしてもやがては、そのくらいの年齢で命が尽きてしまう。時の絶大なる権勢を誇った総理大臣経験者もこのように辿る。ましてや凡人は、女 87 歳、男 80 歳くらいの平均寿命で死ぬ。

ピークまでの「登山域」とそれ以降の「下山域」の2段階、あるいは3段階の序破急「序は導入部、破は展開部、急は結末部」。あるいは4段階の「青春・朱夏・白秋・玄冬」、または「学生期（0～24歳）・家住期（25～49歳）・林住期（50～74歳）・遊行期（75～90歳）」に置き換えることも出来る。世界水準の権威ある医療関係者などが囲んでいても、天皇陛下も総理大臣もこのように辿る。私は、還暦前後から、体（行動力）は衰えて行く（来る）が、心・技は幽離し孤独の世界に飛び込んで行く様相を覚えている、しかし、そこは寂しいところではなく、自由満喫の優美が広がる世界である。

今の私は、児童・幼児期の私とイコールなのだ。吾が子供の頃を思い出し、さらに孫の幼児期のはしゃ

ぎぶりを見て来たが、今の私は幼^{まれ}児的言動に酷似している。偶には、時々^{まれ}に軽挙妄動もある。それは、いわゆる「幼児返り」そのものである。今の私に相当する児童・幼児期とは3歳～5・6歳くらいだ。幼児期レベルの無邪気な好奇心と懐疑心の発達過程を感じる。ただ、今の私が児童・幼児期と違うのは、幾ばくかの経験を積んで来た事から、物事の本質に迫りたいとする心（探究心）は、少しは練れて来たような気はする。「先々そうは長くない人生」という残余の命の到来を意識するようになって来た。

その2；心とは、形も無く重さも無く、色もない。体とは、形があつて、重さもあり、肌色がある。技とは心と体の両方の特質を持っている。図-2のイメージである、すると技は心と体の媒介エネルギーの意義を持つ、また、別視点からは心身一如の意も現^{あらわ}す。さらに発展的に図-3の「陰陽魚眼太極図[別記]」に繋がる。重なっている処の技は同図の魚眼（陽中陰、陰中陽）相応である。



その3； 還暦の頃までは、分別^{べんべつ}知なるもの[別記]の旺盛さを感じたが、それ以降は、「もの・ことは一つ」という本質の世界に向かう意識が強まりつつあることを自覚するようになった。森羅万象の生涯は『生・旺・墓』を辿るとい^{たど}う言葉を思い出した。何事も『生まれる=生』の始まりがあり、次第に『壮んに(盛ん)=旺』になり、やがては衰退から『死=墓』に至り終わってしまう。一つだけに見ればそれで完結となるが、物事の連関性・鎖交性の視点からは、あるいは、一切の存在は他との関係が縁となって生起するという縁起の視点からは、何事も始まらなければ壮んにならず、壮んになることなくして終わりはなく、終わりがなくしては始まらない。個体は『生・旺・墓』で完結しても、宇宙の係りでは、一方に死滅・根絶があれば、他方は生成・生起し、こうして無限に輪廻転生の流れがある。栄枯盛衰・自然淘汰は人為的に左右されない宇宙の掟であり、いくら立派なことを述べても、きちんと死ぬのだ。その個体が死滅したからといって、憎い相手や地域や地球・宇宙は滅ばない。回顧すれば会社現役時代には、一時期、この俺がこの業務担当を外れるとこの部署はどうなるのだろうか、などと奢^{おご}った風になり、息巻いたこともあったが、後には、まったくの無意味である、ことが分かった。

その4；司馬遼太郎の著書「世に棲む日日」に次のような処がある。「・・・松陰（吉田松陰）の旅は、このようである。ゆく先々の蔵書家から書物を借りて読み、人物がいると聞けばそれを訪ねて意見を聞き、いわば花から花へ移る蝶のように自分自身を移動させつつ、そのようにして蜜を吸ってゆく。・・・」との一節、大好きなフレーズである。

これらからは、相手に師事を乞うには、こちらが真^{まこと}つ新でなければならない、下心は以心伝心、誰も相手にしてくれないという事を訓えてくれる。私も素直な気持ちで、生の訓えを学ぶ謙虚さを肝に銘じて交わっているつもりである。図-4は、松陰の遊歴コースである。現代のような交通手段が発達していなかった時代であり、松陰の生き様に無性に憧れる。

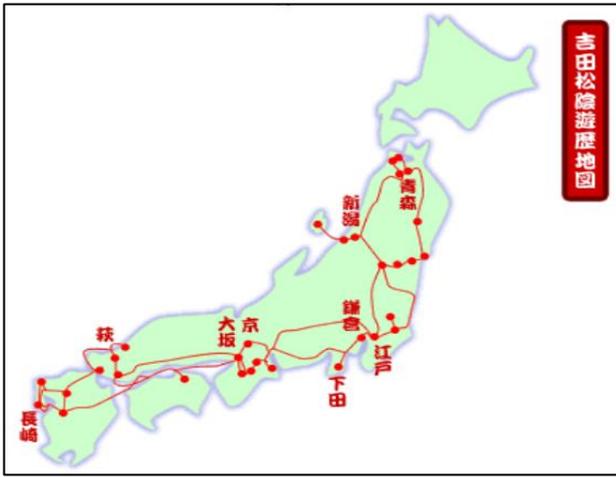


図-4

その5；図-5は、今の私そのものである、片や紅葉の相、色付きは多彩だが間違いなく枯れる前兆である、片や桜満開の相、些細なことにウキウキと浮付く、老人相と幼児相のせめぎ合いである、不離一体の両方を抱えてこの揺れ・ゆらぎ楽しんでいる。桜は一時華やかだが、時が来れば風の赴くままに流され、花は花の命を失う。紅葉とは落葉の前に葉の色が変わる現象のこと、逆に色付きは葉が葉の命を失うことの予兆である。葉が葉の命を失う直前にもがいて熱を帯びて大暴れする姿似である。

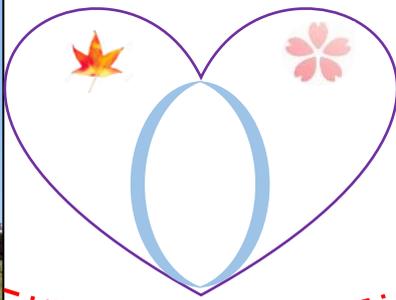


図-5

その6；特に還暦を過ぎたころを思い出した。この歳に相応しい「①探究心（物事の真相・本質を探りたいとする向上心）」が自噴（直感力・洞察力・思索力が内発）し、すると別の処で右往左往していた「②好奇心（未体験・未知の事物に対する強い関心欲）」が活動的になり、そしてその思いを実行・実現したいという「③冒険心」、すなわち「知行合一」の行動欲、いわば探究心と好奇心の統合に駆られる心の蠢きに従順になりたいと強く念ずるようになった。もう歳だから、などと弱音を吐く萎縮的な防衛本能は脇に追いやられるような境地になった。

こんなことを思う中でつたない短歌が浮かんだ。

- 「この時に桜・紅葉が同時咲く 散るも残るもいずれが先か」
- 「春が過ぎ暮れ行く秋が足早に しおれた花の実は春を待つ」
- 「大香のブランド育ちの花は散り 桜吹雪が紅葉に絡む」
- 「この歳は洩垂れ小僧の真っ盛り まだまだまだよ修業が足りぬ」
- 「こっそりと鏡に映すおしりには 青筋2本再び生えた」

(end)